

2024年7月14日（日）主日朝礼拝説教

『エリヤを養うもの』井上隆晶牧師

列王記上17章1～16節、マタイによる福音書6章30～34節

①【主は生きておられる】

旧約聖書の中にエリヤという有名な預言者がでてきます。「よげん」という言葉には「予言」と「預言」の2つの漢字があります。あらかじめ未来のことを言い当てるときに使われるのは「予言」。一方「預言」は神様の言葉を預かり、それを伝えることです。神様は現在、過去、未来のことも語られるので、預言の中に予言も含まれるのです。これとは別に「先見者」というのが出てきます。この人たちは、言葉を聞くだけでなく未来に起こる出来事の映像が見えるのです。

さてエリヤは北王国イスラエルの王アハブに言います。「わたしの仕えているイスラエルの神、主は生きておられる。わたしが告げるまで、数年の間、露も降りず、雨も降らないであろう。」(列王記上17:1) この「主は生きておられる」という言葉は、旧約聖書の中に40回以上出てくる言葉で、「神は本当におられる、嘘ではない」という意味です。飢饉や干ばつというのは聖書では神からの呪いとして語られています。「あなたが悪い行いを重ねて、わたしを捨てるならば、あなたの行く手の働きすべてに対して、主は呪いと混乱と懲らしめを送り…頭上の天は赤銅となり、あなたの下の地は鉄となる。主はあなたの地の雨を埃とされ、天から砂粒を降らせる。」(申命記28:20、23～24) これを読んで、恐ろしいと思う人と、昔の人たちの作り話だ、神話だとして笑う人がいるでしょう。牧師たちの中にも神話だと言う人がいます。笑う人は神の言葉が実際になったという体験がない人です。神の言葉に従ったことがないので分からないのです。しかし神の言葉に従った人だけは「主は本当に生きておられる」という言葉を語る事ができます。私は神を恐れます。先週、お話しした世界的異常気象も神からの懲らしめであり警告だと思えます。神を敵に回すことは恐ろしい事です。

②【エリヤを養うカラスとやもめ】

主なる神はエリヤに語ります。「ケリトの川のほとりに身を隠せ。その川の水を飲むが良い。わたしはカラスに命じて、そこであなたを養わせる。」(列王記上17:3～4) ケリト川はヨルダンの東とあるだけで、今日もその場所は明らかではありません。しかし「身を隠せ」とあるので、人里離れたところであったと想像できます。住み慣れたところから離れてそんな荒野に行くことは決して簡単なことではありません。何を食べて生きてゆけばよいのか、人が神の言葉に従って生きようとするとき、誰でも不安を感じます。そして食べるために、生きるために、多くの人は神の言葉に従うことを躊躇します。おそらくエリヤも同じだったと思います。そこで主は「わたしはカラスに命じて、そこであなたを養わせる。」と約束をされました。一体だれがこんな約束を信頼することができるでしょう。しかし

エリヤは頼りないカラスではなく、約束された神を信じて従いました。そのとき、数羽のカラスが朝パンと肉を、夕方にもパンと肉をエリヤのもとに運んできたのです。彼はそこで自分を養って下さる神様を体験することができたのです。

しばらくするとその川も涸れてしまいました。すると神様はエリヤに「立ってシドンのサレプタに行き、そこに住め。わたしは一人のやもめに命じて、そこであなたを養わせる。」(同 17:9) と言われました。そこでエリヤは立ち上がってサレプタに行きました。町に入ると、薪を拾っている一人のやもめに会いました。エリヤが彼女に水とパンを求めると「私の家にはもう一握りの小麦粉とわずかな油しかありません。それを食べたなら、後は死ぬのを待つだけです」といいます。エリヤは「恐れてはならない。帰って、あなたの言ったとおりにしなさい。だが、まず、それで私のために小さいパン菓子を作って、わたしに持ってきなさい。」主はこう言われます。「主が地の面に雨を降らせる日まで、あなたの家の壺の粉は尽きることなく、瓶の油もなくなる。」(同 17:13~14) 有名な言葉ですね。これを聞いて「やもめは行って、エリヤの言葉どおりにした。」(7:15) と書かれています。すごいなあ、と思います。彼女は自分と子供の食べる最後の食べ物をエリヤに分け与えたのです。自分と子供の命を神の言葉に委ねた、神の約束に賭けたという事でしょう。すると、エリヤの言ったとおりに、壺の粉は尽きず、瓶の油もなくなり、食べ物に困ることはありませんでした。私はここから二つのお話をしたいのです。

③【神が命じられた場所を信じなさい】

神様は「そこであなたを養わせる」(4、17 節) と二回も言われました。ケリト川がどんな川か分かりません。僅かな流れしかない心細い川だったかもしれません。でも「そこで養わせる」と言われたのです。神が置かれた場所を信じることです。もちろんそこで養われなくなったら、次の場所に神はその人を連れて行かれるでしょう。でも人間的な思いで移ってばかりいたらいつまでたっても養われません。修道士が言うように「植えては抜き、植えては抜きしていたら、いつになったら根が生えるのか」です。

●私は都島教会に来る前、瀬戸内海の手島という小さな島の教会に赴任する予定でした。都島教会は当時、月～土までベビーセンターをし、日曜日に礼拝を守っていました。しかし牧師さんが足を痛めて保育が出来なくなり、辞任することになったので、急遽人が足りなくなりました。そこで「誰でもいいから来てほしい」と言われ、私たち家族が来たのです。その時、私はまだ神学生で、都島教会に住みながら学校に通いました。妻は保育士としてベビーセンターで働きました。牧師になった時、最初の給料は5万円でした。信者さんは2人だけで、その二人もやがて来なくなり家族3人で礼拝することもありました。今まで何人もの牧師が来ては去っていきました。でも私はここにとどまりました。ここで通用しなければ、どこに行っても同じだろうと思ったからです。小さいことに忠実でなければ、

大きなことは任せられません。私は「まず、神の国と神の義を求めなさい。そうすればこれらのものはみな加えて与えられる。」(マタイ 6:33) というイエス様の約束を握りしめて毎日祈りました。この言葉が嘘なら、キリスト教信仰をやめようと思いました。聖書の中にある他の約束も嘘という事になるからです。しかし神様は、約束通り助ける人を次々と送ってくださり、仕事を与えて下さり、奇跡を見せて下さり、必要を満たして下さいました。今日まで生活に困ったことは一日たりともありませんでした。

④【思いがけない人を通して養う】

神様はカラスややもめを通して、エリヤを養うといわれました。「お金持ちに命じて」なら分かりますが、「カラスややもめ」など、どう見ても力なく、頼りない存在です。でも神様はその弱いもの、頼りないものを通してあなたを養うのです。人を養うのは人ではなく神であることを教えるためです。私は教会に来る人たちは、すべて神が送られた人だと思っています。そのようにその人を見、関わろうと今日まで努力してきました。主はこの教会に多くの精神障害者を送られました。先日もある委員会で話をしたら、「先生の教会はいろんな人が来るなあ」とみんな感心していました。主が送られるのです。「病気になることのない人を友達に選ぶな」ということわざがあるように、彼らを通して「人間とは何か」を教えられ、人との距離の取り方を学び、病を負いながら生きる姿を見て勇気が与えられました。私は彼らを通して牧師にさせられました。神様は不思議な方法や、この人がと思う人を通して私たちの魂を養うのです。

キリスト教信者にとっていちばん大事なことは、その人が「神の言葉」で動いているか、人ではなく神によって生きているか、神を知っているかだと思います。どこでも、誰に対しても「わたしの仕えておられる主なる神は生きておられる。」と大胆に言える人でありたいのです。キリストを伝えようと言うのに、そのキリストを知らなければどうして伝えることができるのでしょうか。キリストを伝えようと思えば、まず自分がキリストの偉大な力の体験者にならねばなりません。初代教会では、使徒と認定されるためには「復活したキリストに合ったことがあるかどうか」でした。ペトロは言います。「私はキリストの威光を目撃したのです。」(Ⅱペトロ 1:16~17) 今の教会に力がないとすれば、説教の言葉が上滑りするとしたら、キリストを体験せず、知識だけで語るからです。神を知らない者が神を語っており、キリストを知らない者が、キリストを伝えているのです。だから力がなく、伝わらないのです。それではいけません。だから、まず神の言葉に従うのです。そうしたら「生きておられる神」を体験することができます。どうせ信仰するなら、形だけでなく、本物の信仰をしましょう。主がその思いを私たちに与えて下さるように祈りましょう。